ふるさとポケットガイドブック

シリーズ6

前田正名と釧路の製紙業

日本製紙釧路工場

ご案内します。
どこより素敵なわたしたちのふるさと。

スケールの大きな自然で知られる根釧台地は、その地理的条件、
歴史的役割のうえに独特の文化、情緒をはぐくんできました。
歴史、伝統、そして人情も、実に味わい深い土地柄です。
この魅力を少しずつでもかたちにしたいと、
本シリーズの企画・制作をスタートさせました。
名所を巡りながら、力強く生きる人々の営み、
思いに触れていただくガイドブックです。
地元の方には、もう一度ふるさとに出会い、また好きになるきっかけに、
旅の方には、発見と感動への水先案内人となることを願って。

大地みらい信用金庫
創立100周年記念事業実行委員会

大地みらい基金
設立30周年記念事業実行委員会

～ふるさとの記憶をみらいへつなぐ～

INDEX

くしろの顔をつくった男の物語。 …… 03

「無冠の農相」「布衣の宰相」前田正名
嘉永3年、薩摩生まれ。坂本龍馬に刀をもらう。 06
英和辞書編纂で留学費用捻出。 …… 06
西洋から日本を見る目を育てた大久保利通のはからい。 07
官界で活躍。山梨県知事も。 …… 07

まず是から
地方の窮状を指摘し政府と衝突。『興業意見』 08
非職されても信念は変わらず、農商務相の座も蹴る。 08

～まず是から～ 脚絆に股引、蓑、行李、
手にはこうもり傘 前田行脚
全国津々浦々で講演。 …… 09
知られざる正名の功績。 …… 10
地方振興で、再評価される異才。 …… 10

～前田正名がくしろに残したもの～
北海道初パルプ工場前田製紙 天寧で創業。
文化の香りを呼ぶ工場。 …… 11
紙のまち胎動前の釧路経済。 …… 12
地元の期待を背負い明治34年稼働。 …… 12

守られた新たな産業の芽 前田製紙の再編。
製紙業を残すため北海紙料に組織替え。 …… 13
暗闇に浮かぶ、釧路最大の工場。 …… 13
大手・富士製紙第四工場に。紙製造も開始。 14
天寧の人口増加。 …… 14
第四工場、わずか2時間で全焼。 …… 14

製紙工場の鳥取村移転。
士族のひらいたまちが製紙城下町に。
鳥取村へ、前田正名から内報。 …… 15
村の存亡をかけた誘致運動。 …… 15
大正9年、富士製紙釧路工場誕生。 …… 16

紙のまち鳥取はあこがれのまち
工場が動き、まちができた。 …… 17
道東一のモダン建築も登場。 …… 18
社宅は鉄筋4階建ての文化住宅。 …… 18
大楽毛には東洋一の段ボール製紙工場誕生。
紙のまち釧路、両翼を得て羽ばたく。 …… 18

前田正名がくしろに残したもう一つのもの。阿寒湖の自然。
国有未開地払い下げ。阿寒の自然を保護・観光の視点で。 19
正名の没後13年、日本初国立公園の1つに。 20

阿寒の運命を決めた前田一歩園
家訓にのっとり公共に利する温泉街を。 …… 21
元タカラジェンヌの未来への決断。財団法人化。 22
消滅を逃れたまりも群生地。 …… 22
厳しく愛情深い「阿寒の母」、光子。 …… 22

世紀を越えて、いまも現在進行形の正名の精神。
あかんの自然と共生する類をみない自律のサイクル。 23
阿寒湖温泉に入ると自然保護に貢献できる。 …… 23
踏み出した一歩が、100年の時を超え、いま輝きを放つ。 24

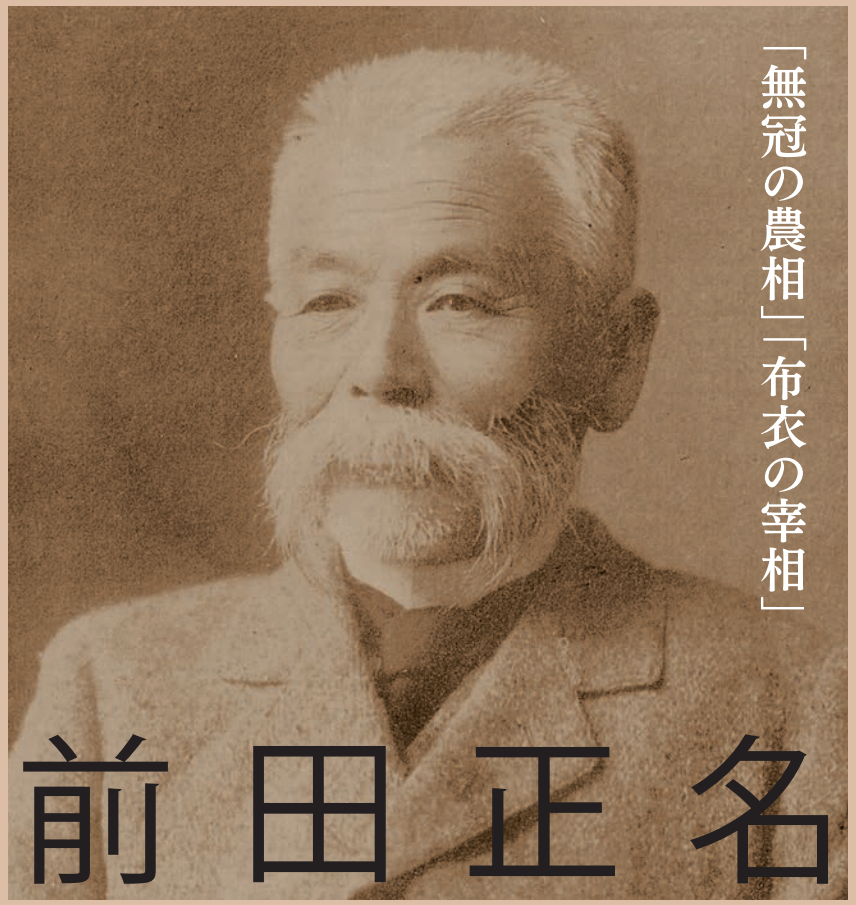
釧路周辺マップ …… 25

くしろの顔をつくった男の物語。

明治期、政府が「富国強兵」をスローガンに欧米列強と並ぶ
国家づくりを急ぐ中、その危うさを指摘、
政府と対立し自らのキャリアを捨てても、
地方産業に立脚した豊かな国づくりを説いて回った
ひとりの薩摩男児がいました。
近代史上脚光を浴びることは少ない隠れた偉人、前田正名。
紙のまち・くしろを誕生させ、
阿寒の自然保護を後世に約束させたその哲学は、
いま、時を超えて共感を呼んでいます。

マリモの群生で知られる阿寒湖。
前田正名がいなければ、世界的に貴重な群生地は
消滅していたかもしれません。

道東経済の主要都市であり
豊かな自然と共生するまち釧路に
大きな足跡を残した
明治の異才。



国立国会図書館蔵

嘉永3年、薩摩生まれ。坂本龍馬に刀をもらう。

坂本龍馬

前田正名はペリー来航3年前の1850年、近代日本への胎動の中で薩摩の漢方医の家に7人きょうだいの末っ子として生まれました。8歳で親元を離れ蘭学教育に尽くした八木称平に師事、15歳で俊秀集まる長崎の語学塾に学びました。英国船購入をめぐる薩長連合のトラブルに坂本龍馬が調停に立った際には16歳の正名も薩摩藩の密使に。小柄な正名を見た龍馬は「君の刀は長すぎる。余の刀を差していきたまえ」と自らの刀を渡したといいます。

英和辞書編纂で留学費用捻出。

薩摩辞書

維新変革の渦中、長崎にいた正名は当時の志ある青年の例に漏れず、留学を強く希望しました。下級藩士出身ゆえに薩摩藩の英国留学生派遣の選にもれた正名は自費留学を決意、渡航費を得るため兄や宣教師の協力を得て『和訳英辞書』の編纂に乗り出します。日本初の英和辞書を基本に誤りを正し、発音のカタカナ表記を加えたこの辞書は『薩摩辞書』と呼ばれ、その後約20年間に6回復刻、長く用いられました。1869年（明治2）、念願叶って19歳でフランスへ。時は普仏戦争。パリ籠城、陥落、パリ・コミューンの成立を経験した正名の中には、図らずも「和魂」が目覚めました。

西洋から日本を見る目を育てた大久保利通のはからい。

薩摩辞書の政府買い上げ金と外務省補助金でのフランス留学には、「維新の三傑」の1人、同郷の大久保利通の計らいがありました。留学中の正名を在フランス公使館二等書記生に任命したのも、パリ万博の事務官長に据えたのも大久保でした。万博開始直後に大久保は暗殺されますが、正名は1881年（明治14）大久保の姪、イチと結婚しました。

正名は1921年（大正10）71歳で亡くなる前年まで計8回欧米に渡り、のべ十数年滞在しました。留学生、パリ万博事務官、フランス領事、地方産業振興の運動家、立場は様々でしたが、その目的は一貫して欧米で日本を顧みる、日本の近代化の方向性を定めることにありました。

1873年（明治6）パリに立ち寄った大久保利通（中列左から3人目）と鹿児島出身の留学生たち（前列左から3人目が正名）

写真提供／吉川弘文館

官界で活躍。山梨県知事も。

正名は1878年（明治11）、パリ万博に事務官長として臨み、日本製品が好評だったことから地方の伝統産業を近代化し、その輸出によって富国化を図ることを構想します。帰国後、大蔵省や農商務省で要職を歴任し、一貫して農村を基軸とした殖産興業を唱えました。1888年（明治21）には8カ月という短期間ながら山梨県知事を務め、ワイン生産の基礎をつくりました。

パリ留学中の正名がモデル宝塚歌劇団ミュージカル「Samourai（サムライ）」

2011～2012年に東京、大阪で上演された宝塚歌劇団雪組のミュージカル。パリに渡った正名が普仏戦争、パリ・コミューンの成立に巻き込まれ、坂本龍馬から受け継いだ刀でパリ市民と共に戦うというフィクションです。正名の勇敢で高潔なサムライ魂がドラマチックに描かれています。

まず 是（ぜ） から

今日の急務は国是・県是・郡是を定むるにあり

地方の窮状を指摘し政府と衝突。『興業意見』

列強に伍する近代化を急ぐ政府は海外技術の移入による重工業中心の政策をとっていました。これに対して正名は農業立国を志したフランスを参考に、農業や日本の伝統産業を重視し、それを健全な底辺として近代工業を育成すべきという考え。真っ向から対立するものでした。農商務大書記官兼大蔵大書記官だった正名は、農村の犠牲の上に強引に進む国づくりに危機感を抱き、地方の窮状を入念に調査、自身の構想に基づいた各県の今後の展望を全30巻の『興業意見』にまとめます。膨大な手間をかけた編集には後に首相となる高橋是清も、正名の部下として尽力しました。

『興業意見』で正名は「是」を定めることを重視しました。「是」とは道理にかなう正しいこと、企業で「社是」と使われるように「進むべき道」です。

非職されても信念は変わらず、農商務相の座も蹴る。

『興業意見』に盛られた計画のうち種牡牛馬取締方法など細かな数項目だけは実現されたものの、結果的には挫折に終わりました。関わった者たちは農商務省から一掃され、正名も翌年非職追放となります。明治22年に復職するも翌年には下野。その後は農商務相の座を差し出されても断り、没するまで政治を離れ、無冠で「是」を説き地域産業振興に尽力しました。

「興業意見」を中心とする前田正名関係文書
写真提供／吉川弘文館

脚絆（きゃはん）に股引（ももひき）、蓑（みの）、行李（こうり）、手にはこうもり傘 前田行脚

全国津々浦々で講演。

1892年（明治25）8月、炎暑の中、前田正名は全国での遊説を始めました。前田行脚と呼ばれるもので、翌年には北海道を初めて訪れています。脚絆に股引、蓑、行李、こうもり傘とボストンバッグという奇妙な姿から時に変人扱いされながらも、全国を回り、茶や生糸、織物など地域の産物の品質の向上と業界団体結成の必要性を説きました。正名はこの活動の資金捻出のために東京の自宅はじめほとんどの資産を売ったといわれます。

行脚姿の前田正名（明治27年）
写真提供／吉川弘文館

村力おこらざれば、郡力たらず、郡力たらざれば県力たらず、県力たらざれば国力到底たらず

知られざる正名の功績。

歴史上ほとんど脚光を浴びることのない正名ですが、日本の産業に数々の功績があります。理念がそのまま社名となった企業も存在します。養蚕のまち京都・何鹿（いかるが）（現・綾部市）で正名の演説に共鳴した波多野鶴吉が発足した繊維メーカー「郡是製絲（ぐんぜせいし）」、現在のグンゼです。また、フランスから持ち帰った種で始めた神戸阿利襪（オリーブ）園は日本初のオリーブ搾油に成功。また、播州葡萄園は日本のぶどう栽培のルーツとなりました。国産ワイン生産においても正名は陰の功労者といわれます。正名が手がけて短期的には失敗に見えたことが、時を経ると予想以上の価値を現すのです。

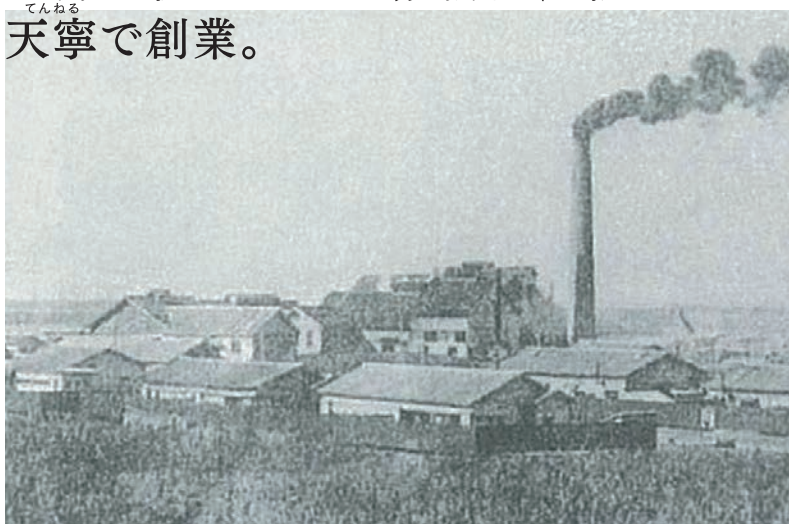
神戸市
湊川神社
オリーブ樹

地方振興で、再評価される異才。

100年以上も前に、フランスのシャンパンを例にとり日本酒の海外販売の必要性を訴えていたほど先見の明があった正名。地域資源の活用、「是」の作成、組織による協働、正名の唱えたものは、現在の地方振興にストレートに届くメッセージです。時代がようやく追いついたように、前田正名の再評価が始まっています。

「興産致富の道」前田正名著（大正3年）
／国立国会図書館蔵

北海道初パルプ工場 前田製紙天寧（てんねる）で創業。



前田製紙工場〜富士製紙第四工場／釧路市教育委員会

文化の香りを呼ぶ工場。

1899年（明治32）前田正名は、旧知の財界人から出資を募り、北海道で初めてのパルプ工場「前田製紙合名会社」を資本金20万円で設立しました。パルプの原料を生む森林、釧路川・阿寒川の豊富な水、燃料の石炭、輸送のための港、釧路は必要なものがすべて揃う製紙業の適地でした。

日本の製紙業は文明開化と共にスタートしました。現在のように多様なメディアが存在しない時代、新聞や雑誌、書籍、証券などに使われる紙の消費量はまさに文化のバロメーター。1872年（明治5）の東京日日新聞（現・毎日新聞）を皮切りに讀賣新聞、朝日新聞と日刊新聞も次々と創刊されました。政府も、国民の啓蒙に役立つ新聞の普及を支援、急速な近代化を背景に製紙業は勃興しました。

春採坑選炭場（昭和12年）／釧路市中央図書館蔵

紙のまち胎動前の釧路経済。

釧路川の漁船（大正12年頃）／釧路市教育委員会

前田製紙が設立された頃の釧路は、大きく3つの顔をもっていました。

明治の前半から春はニシン、夏はこんぶ、秋は鮭漁で賑わう「漁師まち」。明治30年には帆をもつ川崎船による沖合でのタラ漁も始まりました。2つめは「石炭のまち」。川湯・アトサヌプリの硫黄精錬、輸送のために1887年（明治20）春鳥（春採）炭山で本格的な採炭開始、釧路とその周辺の石炭開発が急速に進みました。前田製紙も春鳥炭山の石炭を使いました。そして「木どころ」。豊富な森林資源、運材のための川、延伸される鉄道、普通貿易港指定を受けた港、林業に有利な条件を揃えた釧路は木材の集散地でした。エゾマツやトドマツはパルプ原料に、広葉樹は主に枕木用として欧米、中国へ盛んに輸出されていました。

地元の期待を背負い明治34年稼働。

前田正名が前田製紙の工場設計、技術指導を任せたのは日本における洋紙製造業の先覚者の一人、大阪製紙副社長・真島襄一郎です。真島は1899年（明治32）秋に来道し、工場の場所を阿寒川と釧路川の合流地点の下流左岸、天寧に決め建設に着手。道内には機械工場がないためボルト1本でも東京から取り寄せるという不利不便を克服し、翌33年末、10万円で諸設備を完成させました。釧路川に初代幣舞橋が架けられた頃です。

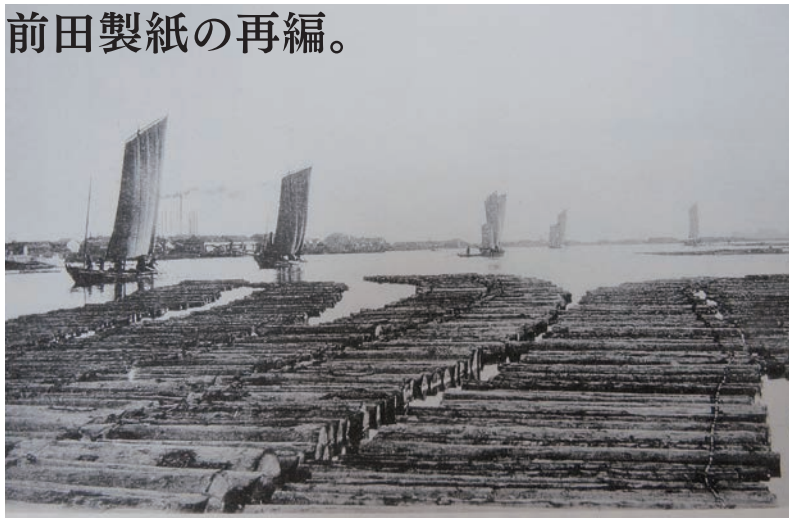
1901年（明治34）5月、前田製紙は地元経済界の期待を背負ってパルプ製造を開始。7月には前田正名が来釧、実業家など300人以上を集めた講演会で、世界から見た日本の現状と展望、釧路の重要性を熱く演説し、喝采を受けています。

男子工57人、女子工10人で稼働した前田製紙はこの年、産額6万7200円のパルプを製造しました。

明治30年代、1円の価値は？

現在の物価を明治30年頃の物価と単純に比べると約3800倍、当時の1円は現在の約3800円になります。しかし、明治30年頃の小学校教員やお巡りさんの初任給が月8〜9円、大工さんや工場のベテラン技術者で月20円くらいだったことを考えると、庶民にとっての1円は現在の2万円程度の価値があったともいわれます。

守られた新たな産業の芽
前田製紙の再編。



釧路川の木材流送の光景（大正5年） 北海道立図書館蔵

製紙業を残すため北海紙料に組織替え。

前田製紙では初年度から難事が続出しました。エゾマツ・トドマツの原木に機械設備が合わない、バラック建ての工場の蒸解釜が冬に温まらず、できたパルプは半煮で売り物にならないなど、良質なパルプ製造にこぎつける前に経営難に陥ります。しかし前田正名は前田製紙としての事業は諦めたものの、工場を残すため大手、富士製紙に相談、1902年（明治35）同社の資本参加を受け資本金50万円の「北海紙料株式会社」として再スタートしました。

暗闇に浮かぶ、釧路最大の工場。

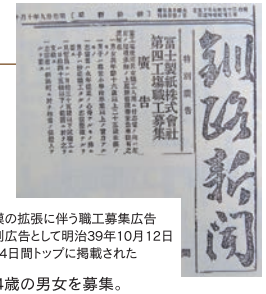
北海紙料は職工129人を雇用、1万2000坪の用地に工場、事務所、倉庫や社宅が立ち並びました。釧路のまちに初めて電灯がつくのはまだ先の明治42年ですが、北海紙料には前田製紙時代からの発電所があり電灯の下で夜間作業も可能。真っ暗な釧路の夜に明るく浮かぶ工場が威容を放っていました。1904年（明治37）日露戦争が勃発すると紙の需要が激増、同年のパルプ生産高は1080トンを記録しました。

大手・富士製紙第四工場に。紙製造も開始。

1906年（明治39）、北海紙料は親会社に吸収され富士製紙第四工場となります。工場は500坪増設、アメリカ製最新機器が導入され、パルプに加えて紙の製造も開始しました。同年はパルプ770トン、紙1010トンを生産、売上高は約17万円に上りました。翌年には、釧路新聞が釧路・旭川間鉄道開通記念特集号の準備中、運送中の新聞用紙が函館の大火にあって焼失、富士製紙第四工場に急きょ依頼し発刊を間に合わせたエピソードも残ります。

天寧の人口増加。

1907年（明治40）の職員職工の数は計233人、社宅は24棟140戸建てられました。これは当時の釧路の戸数3500戸の4％にあたります。また、天寧では牧畜業、農業、林業に従事する人口が増えていたこともあり、小学校の付属施設だった天寧教授場は明治41年、新築され天寧尋常小学校となりました。



規模の拡張に伴う職工募集広告
特別広告として明治39年10月12日より4日間トップに掲載された

16～24歳の男女を募集。
見習員の日給上限35銭、試験工は45銭。

第四工場、わずか2時間で全焼。

製造した紙が天津、香港にも輸出され昼夜を問わず稼働していた富士製紙第四工場でしたが、ほどなく悲劇に見舞われます。1913年（大正2）1月4日早朝、機械室より出火、2時間たらずで工場、倉庫、事務所など建物16棟1500坪、原木や製品、すべてが焼き尽くされました。損害額は30万円以上ともいわれます。工場がなくなり職員、工員、下請け業者、多くがこの地を去り天寧のまちは火が消えたように。そして、釧路の歴史から製紙業がいったん消えてしまいます。

現在の釧路川

釧路川に沿って工場が並んでいた。
富士製紙第四工場は山県釧路製材所、草野マッチ軸木製造所とともに釧路三大工場と呼ばれたが、売上高は2～3倍と圧倒的な規模を誇った。

製紙工場の鳥取村移転。士族のひらいたまちが製紙城下町に。

富士製紙釧路工場（昭和初期）／釧路市中央図書館蔵

天寧にあった工場の火災から5年後、工場誘致に動いた鳥取村で大規模な製紙工場建設が始まりました。周囲は荒涼とした原野。遠く釧路駅から工事の様子が見えたといわれます。

鳥取村へ、前田正名から内報。

釧路から製紙工場が消えて2年。1915年（大正4）、前田正名より鳥取士族の移住地・鳥取村の有志に「富士製紙重役間で貴村方面に一大製紙工場設置の計画がある。善処するがよい」と内報がありました。悪条件に開拓を阻まれ困窮する鳥取村ではすぐに有志2人を上京させ誘致運動を始めます。様々な事情でこの件は立ち消えとなりましたが、製紙工場誘致という希望が一筋の光として見えてきました。

村の存亡をかけた誘致運動。

翌大正5年5月、「日本の製紙王」と呼ばれる樺太工業社長・大川平三郎の命を受けた田中文太郎が来釧しました。「好機逸すべからず」と鳥取村の有志は陳情書を作成し誓願、ここから全村挙げての誘致運動が展開されます。幸運にも田中は同じ鳥取県の出身。「万難を排してこの村に工場を設置する」と鳥取神社に誓ったといいます。そして同年12月、大川を社長に樺太工業傘下の北海道興業株式会社が設立されました。

大正9年、富士製紙釧路工場誕生。

工場用地のために鳥取神社や村役場は移転し、北海道興業は鳥取三番組（現・日本製紙釧路工場所在地）に15万坪を確保、大正7年、村民悲願の工場建設が始まりました。人の姿を隠すほど柳の茂った原野で工場と周辺施設の工事が進む中、翌年、北海道興業は富士製紙と合併、大川平三郎は富士製紙の社長に就任します。そして、1920年（大正9）富士製紙釧路工場としてついに操業を開始、同じ場所で100年にわたり釧路の製紙事業を隆盛へ導く釧路の顔となりました。

鳥取村のはじまりと製紙工場

明治17年、士族41戸207人移住。

明治維新後の藩の解体、インフレで窮乏した鳥取士族が生きるために人跡未踏のベットマイ原野の一角に集団移住してきたのが鳥取村の創始です。1884年（明治17）の第1次、翌年の第2次合わせて105戸、513人の村落が形成され、士族は刀を鍬（くわ）に持ち替えて湿原の開墾に挑みました。

氾濫、海霧、寒気、湿地、苦難の村づくり。

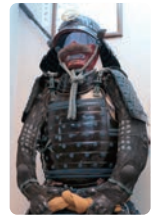
道東の厳しい気候、川の氾濫や野火など頻発する自然災害で開墾は想像を絶する苦難の連続でした。最初の移住から製紙工場稼働までの35年の歴史は「ただ困苦、窮乏、陰惨、悲痛の血と汗の記録」といわれます。村の生活を激変させ、進歩、誇りをもたらしたのは製紙工場だったのです。

トリビア　鳥取県、消えた5年間

明治4年、廃藩置県で誕生した鳥取県は、明治9年に隣接する島根県に併合されてしまいました。しかし住民の間で鳥取県再置運動が活発化、これを受けて視察に訪れた山県有朋により明治14年9月12日再び鳥取県が置かれました。この日は鳥取県民の日になっています。

●鳥取百年館　見学無料

鳥取地区の開基100年を記念して鳥取城のイメージを復元して建てられた資料館。移住者が故郷から持参した槍や太刀、生活用具、支給された農具、写真や地図などが展示され、見応え十分。



釧路市鳥取大通4丁目2-18 鳥取神社境内
公開時間／9:00～16:00（休館日／9月13日～16日、年末年始）

紙のまち鳥取は あこがれのまち

鳥取市街の全景（昭和8～11年頃）北海道大学附属図書館蔵

1918年（大正7）に着工した鳥取村民悲願の製紙工場は、1920年（大正9）操業を開始。誕生した「紙のまち」はめまぐるしいスピードで成長していきました。

工場が動き、まちができた。

富士製紙としてスタートした小さな村の大きな工場は、移住者泣かせの不毛の地を近代的な工場城下町へと変貌させました。

工場建設開始時の鳥取村の戸数は217戸、それが社宅や職工合宿所の建設で操業開始の翌年には倍増、その後も工場の拡大と共に増加します。1949年（昭和24）、釧路市との対等合併時（当時は鳥取町）の戸数は2638戸、人口1万3449人になっていました。

道東一のモダン建築も登場。

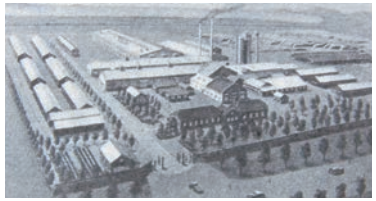
娯楽場と社宅／釧路市教育委員会

鳥取村には小学校が新築され、村で初めての医療機関、富士製紙の附属病院、浴場、附属の豆腐屋、理髪店などが次々とできます。周辺に商店街も形成されていきました。昭和に入ると職員クラブや社宅には当時流行のビリヤード台も設けられ、仕事を終えた従業員がゲームに興じました。1929年（昭和4）には福利厚生の一環で娯楽場をオープン。回り舞台を備え、活動写真も上映する同館は東北海道一のモダンな建物として光彩を放ち、文化の香りをただよわせました。

社宅は鉄筋4階建ての文化住宅。

鳥取は一歩先行く暮らしのあるまちになりました。1923年（大正12）には富士製紙の誓願で新富士駅が開業し、輸送面はもちろん住民の交通の便もよくなります。ちなみに昭和初期にはタクシーが登場。シボレーとフォードの2台、運賃は鳥取～釧路間1円30銭、鳥取村内は70銭、利用客のほとんどは富士製紙の関係者だったといいます。

高度成長期に入ると、社宅は木造長屋から鉄筋4階建てに建て替えられました。スチーム暖房、水洗トイレ、都市ガス、ベランダ付きの仕様は当時の最先端、「文化住宅」として釧路市民のあこがれでした。


富士製紙社宅（昭和8年）／釧路市教育委員会

大楽毛には東洋一の段ボール製紙工場誕生。紙のまち釧路、両翼を得て羽ばたく。

1959年（昭和34）鳥取の工場から7.5kmほど西の大楽毛で東洋一といわれる段ボール原紙生産工場、本州製紙釧路工場が操業を開始しました。当時の先端商品・段ボールが、明治末期から昭和初期まで馬市で名をはせた大楽毛を鳥取同様、近代的なまちへと様変わりさせました。人口も急増し、小学校は児童数が1000人超のマンモス校となり体育館を仕切って教室代わりにしたといいます。

天寧で産声をあげた釧路の製紙業は、100年以上の歴史を重ね、いま、鳥取の日本製紙釧路工場、大楽毛の王子マテリア釧路工場の二大工場が紙のまち釧路を力強く牽引しています。

阿寒摩周国立公園内の森林3892haを前田一歩園が管理しています。

明治末期、前田正名が払い下げを受けた阿寒の森。
濃密な自然の懐にすっぽりと抱かれ
インスピレーションに打たれた正名の一言で、
阿寒の森は時を超えて守られることとなりました。

国有未開地払い下げ。阿寒の自然を保護・観光の視点で。

阿寒湖畔に立つとき、私たちは前田正名の“思い”に包まれることになります。一帯は1906年（明治39）前田正名が国の払い下げを受けて以来、前田一歩園に守られているからです。

正名は自らが地方産業の模範となるべく各地で農場経営・森林事業を展開していた「前田一歩園」事業の一環として阿寒の土地を取得、牧場経営、製紙原木供給などを始めました。しかしほどなく「伐る山ではなく見る山に」と、正名は阿寒の自然保護へと方向転換します。開拓一辺倒の明治・大正期の北海道に“自然保護”“観光”の視点は極めて斬新、海外を知る正名ならではといえます。しかも、皆伐された他の開拓地とは明らかに異なり、切り出しやすい湖畔の樹木が多く残されていました。当初から自然との共生を探っていたようです。正名の目には目先の開拓ではなく、百年先の阿寒が見えていたのでしょう。

阿寒の自然はスイスに優るとも劣らぬ。
この山は伐（き）る山ではなく見る山にすべきである

正名の没後13年、日本初国立公園の1つに。

阿寒は昭和9年（1934）に誕生した我が国最初の国立公園の1つです。日本での国立公園設置を政府に強く勧めたのは、日本初の林学博士で「公園の父」と呼ばれる本多静六。前田正名同様、明治期に留学し広く海外を見た人物で、自ら国立公園調査委員として阿寒を訪れました。（阿寒国立公園は2017年に阿寒摩周国立公園に名称変更）

前田一歩園

阿寒の運命を決めた

3代目園主・光子の住宅は7500坪の庭園と合わせて「前田記念館」として保存されています。

国立公園内にあり、国内外から多くの観光客が訪れる阿寒湖温泉。かたくなに守られる自然と文化が調和したたたずまいには、知ればきっと話したくなるストーリーが隠れています。

家訓にのっとり公共に利する温泉街を。

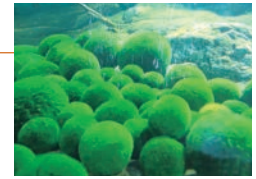
1921年（大正10）71歳で亡くなった前田正名の阿寒の自然への思いは「前田家の財産はすべて公共事業の財産となす」の家憲とともに、次男で一歩園2代目園主・正次へ、さらにその妻、3代目園主・光子へと受け継がれました。正次と光子は1943年（昭和18）、人口300人ほどの阿寒湖畔に移住、森を守りながら阿寒を本格的な観光地にして地元の人の利益にしようと決意、阿寒湖温泉街誕生への道筋をつけました。

一歩園の財産を挙げてこれを公共的基本となし、一部を区分して家計を支持すること

元タカラジェンヌの未来への決断。財団法人化。

前田光子は元タカラジェンヌ、華やかな世界から一転、未開の自然に飛び込んだ女性です。25歳年上の夫・正次を昭和32年に亡くしてからは園主として阿寒の自然をかたくなに守りました。そして自らの死後も森が分断されることなく守られるよう財団法人化を英断。昭和58年、一歩園のすべてを投じて財団法人「前田一歩園財団」を設立し、その生涯を閉じました。

消滅を逃れたまりも群生地。



正名の自然保護の精神がまりもを育んでいます。

昭和の旅行ブームを経て阿寒湖温泉街は発展しましたが、当時の温泉街が少なからずまとっていた享楽的なムードとは無縁の自然の懐に包まれる落ち着いた街になりました。前田光子が目を光らせていたからです。

光子は徹底していました。世界でも希少なまりも生息地である湖畔の北側で一大リゾート開発計画が持ち上がった際は、本州からわざわざ訪ねてきた大物財界人に会うことすらしなかったという逸話も残ります。

厳しく愛情深い「阿寒の母」、光子。

前田光子は阿寒町（現・釧路市）最初の名誉町民に。

「女傑」と呼ばれた一方、光子には立場の弱い者に寄り添う温かさがありました。アイヌ民族には土産品の木彫りが通年製作できる環境づくりなど経済的自立を支援し続け、「ハポ（お母さん）」と慕われました。阿寒の自然と人を守る。正名の志はいまも財団に受け継がれています。

世紀を越えて、
いまも現在進行形の正名の精神。

あかんの自然と共生する類をみない自律のサイクル。

自然の力に逆らわずに森を保全。

前田一歩園財団では、前田家から託された森を守る森林保全事業にとどまらず、北海道の自然保護活動の推進を目的とした調査研究、普及啓発活動、顕彰事業など自然普及事業も行っています。ユニークなのは、これら自然を守り育てる事業を財政面から支えているのが、財団が阿寒湖温泉街で得ている収入であること。3代目園主・前田光子がつくりあげた仕組みで、温泉街の土地の大部分と13本の泉源をもつ前田一歩園財団だから可能なものです。財団はホテルなどに土地を貸し、温泉を供給して、そこで得られる利益を森を守る財源に充てています。人、地域が自然と共生して回り続けるサスティナブルな仕組みです。

村の守護神シマフクロウが旅人を迎えるアイヌコタン。

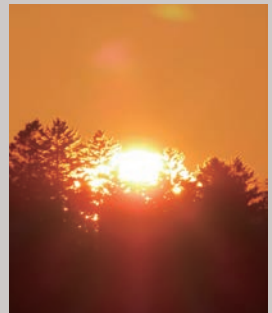
阿寒湖温泉に入ると自然保護に貢献できる。

阿寒で温泉につかり、泊まり、飲食したりお土産を買う、温泉街で使うお金のいくばくかが目の前に広がる自然を守る財源になります。それを知ってから入る温泉は体と心にひときわ温かく、目の前の深い森はより輝きを増しそうです。

踏み出した一歩が、
100年の時を越え、いま輝きを放つ。

一歩園の名の由来は正名の座右の銘「物ごと万事に一歩が大切」から。
額は武者小路実篤が正名の息子・正次にあてて書いたもの。

前田正名は、資本主義国家日本の黎明期、
一貫して農業と地場産業こそが日本を富ませると説き続けました。
釧路においては新しい産業を誕生させ、
阿寒の自然と出会っては、当時は先駆的な自然保護や
観光の視点をもって未来を示しました。
地方振興、環境問題、100年以上を経たいま、
正名の志に再び光が当たり始めています。



釧路周辺マップ

阿寒湖周辺マップ

釧路製紙業の歩み

	日本製紙（旧十條製紙）	王子マテリア（旧本州製紙）
明治32年（1899）	前田製紙合名会社設立 明治34年5月操業	
明治35年（1902）	富士製紙の資本参加を受け 北海紙料として再スタートする	
明治39年（1906）	北海紙料は富士製紙に吸収 合併され富士製紙第四工場 として操業する。	
大正2年（1913）	富士製紙第四工場火災	
大正4年（1915）	鳥取村において製紙工場誘致運動が 活発化	
大正5年（1916）	樺太工業が北海道興業株式会社設立	
大正7年（1918）	工場建設開始。（現、日本製紙工場敷地）	
大正8年（1919）	北海道興業、富士製紙と合併 富士製紙となる。社長は北海道興業の 大川平三郎が就任	
大正9年7月（1920）	富士製紙釧路工場操業	
昭和8年5月（1933）	富士製紙、王子製紙に吸収合併される。	
昭和24年8月（1949）	王子製紙は第2会社として苫小牧製紙、十條製紙及び本州製紙 を設立発足する	
昭和33年7月（1958）		本州製紙釧路工場 建設
昭和34年（1959）		本州製紙釧路工場 操業
昭和51年（1976）		段ボール古紙パルプ 設備稼働
平成5年（1993）	山陽国策パルプが十條製紙と合併 日本製紙となる	
平成8年10月（1996）		新王子製紙との合併。 王子製紙釧路工場と なる
平成13年5月（2001）		王子板紙設立
平成24年（2012）		社名を王子マテリア に変更。現在に至る

富士製紙釧路工場（昭和4年）

本州製紙釧路工場

日本製紙釧路工場

阿寒湖の夜明け

2018年4月発行

大地みらい信用金庫
〒087-8650 北海道根室市梅ケ枝町3丁目15番地
TEL (0153) 24-4101

一般財団法人
大地みらい
基金
TEL (0153) 24-4104